

地 教 史 学 通 信	第 145 号 2019 年 6 月 30 日 全国地方教育史学会
---	---

いよいよ本格的な夏が到来する季節となりました。会員の皆さまにおかれては、ご健勝のこととお慶び申し上げます。

今年度の第 42 回大会は、荒井明夫会員のお世話により、資料見学会・研究発表等とも大東文化大学で開催されました。多くの皆さまのご協力により、無事に全日程を終えたことをご報告申し上げるとともに、大会参加記をお寄せいただいた会員の皆様に御礼申し上げます。今号はその大会参加記を含む大会全体の報告と事務局からの諸連絡をお伝えします。

I. 大会報告

全国地方教育史学会第 42 回大会記

荒井明夫（大東文化大学）

5 月 25 日（土）、26 日（日）の二日間にわたって、東京都板橋区にある大東文化大学・板橋キャンパス及び大東文化会館にて第 42 回大会を開催いたしました。

大会初日の史料見学会は 18 名の会員が参加されました。見学会の前半は最初に板橋キャンパス内の書道研究所と図書館で本学にゆかりのある書家たちの作品をみて頂きました。本学には書道学科がありますが、全国的にみてもまだ珍しい学科です。本学は昔から書道の伝統ある大学ですが、今回は、文化勲章受賞である青山杉雨先生の作品をはじめ、このキャンパスでしか見学できない本学ゆかりの書家たちの作品を鑑賞して頂きました。

史料見学会後半は、2023 年に百周年を迎える本学で進められている沿革史編纂の様子をみて頂きました。まずは本学の歴史資料館のスタッフによる挨拶・編纂の進捗状況による説明がおこなわれ、本学所蔵の史料（周年事業の一環として作成されてきたこれまでの沿革史（誌）類をはじめ、これまで歴史資料館が収集してきた学院時代の史料や大学初期の史料）を見学して頂きました。また板橋キャンパス 2 号館一階には歴史資料館の展示スペースがあります。現在本学の基礎を築いたと評価される「平沼騏一郎と土屋久泰」の展示をおこなっていますが、その展示も見学して頂きました。

懇親会は板橋キャンパス内の学食でおこないました。17 名の会員が参加されました。和気あいあいの内に終了し、臨時バスでキャンパスを後にしました。

大会二日目午前の部は 9 名の会員による研究発表でした。2 会場が設営されました。2 会場とも熱心な質疑応答が展開されていました。50 名（非会員 2 名を含む）の参加でした。

昼食休憩をはさんで「地域と学校」のシンポジウムでした。テーマの趣旨説明のあと、パネリストの軽部勝一郎会員は小学簡易科を中心として岩手県の事例を中心に、坂本紀子会員は新潟県上越市の小学校の事例と商業学校の事例を中心として、谷本宗生会員は石川県金沢市の事例と実業学校の事例を中心として、それぞれ詳細に報告されました。報告を受けた討論では、学校制度が確立する中で「村を育てる学力」（東井義雄）から「村を捨てる学力」へとシフトしていく学校と地域との関係、地域内の諸矛盾と学校との関係、学校設立と官・公・私の性格の問題、などが論点として提示され、活発な議論が展開されました。参加した方から「必要な論点が十分提示され、おもしろいシンポジウムでした」との感想もいただきました。

不十分な点も多々あったと思います。会員みなさまの御支援・御協力で無事大会を終えることができました。

た。心より感謝申し上げます。



大東文化大学・板橋キャンパス。自然環境と人間環境に配慮した「エコキャンパス」をうたう。

(写真省略)

資料見学会。写真中央には、質問に答える大東文化歴史資料館の浅沼薫奈氏（日本教育史）。

【大会参加記】

刺激を受けた二日間—大会に参加して

長谷川鷹士(早稲田大学・院)

5月25日(土)、26日(日)に大東文化大学にて第42回全国地方教育史学会が行われ、私も両日とも参加させていただきました。

大東文化会館に集合し、バスで板橋キャンパスに移動しました。道すがら久しぶりに会ったのだろう大会参加者の方々の間で様々な会話がなされ、今回の大会の盛り上がりが予期されました。板橋キャンパスに到着すると荒井明夫会員からキャンパスの施設について説明がありました。風力発電や太陽光発電の設備があり、環境問題に配慮した先端技術が取り入れられたキャンパスであるとのことでした。キャンパスについての簡単な説明を受けた後、書道研究所・図書館に行き、書の作品数点を見学しました。先端技術についての説明を受けた後に伝統文化としての書を見学できるというところに大東文化大学の先端と伝統の調和を見、大変感銘を受けました。

大東文化歴史資料館に移動し、創立 100 周年に向け進められている年史編纂についてのお話を聞きました。学生の生活の様子なども限られた資料から浮かび上がらせ、また大東文化学院が「漢学」を掲げた意義も積極的に評価しようとする年史編纂の方向性にさまざまな事を学ばせていただきました。現在、私の所属する早稲田大学でも創立 150 周年に向けて年史編纂が進められており、私も少しばかりその編纂作業に参加しているため、大変興味深いお話でした。これまでの年史編纂に使用した資料などもお見せいただき、そうした資料をしっかりと整理している点で大東文化歴史資料館はしっかりしているなと思いました。

歴史資料館の見学を終えた後、懇親会会場に移動し、お酒と食事と会話を楽しみました。参加者が少人数ということもあり、たいへんアットホームな雰囲気です。懇親会は進行しました。荒井会員が日本酒を用意してくださり、会員の方々が喜び勇んで飲んでいたのが印象的でした。

2 日目は大東文化会館の 2 部屋を使って研究発表が行われました。私も 4 つほどの発表を聞きました。いずれの会員の発表も鮮明な問題意識に基づいて研究がされており、またフロアからも建設的な質問がなされ、実りの多い研究発表であったと思います。

公開シンポジウムでは「地域と学校」という本学会にとっては中心的なテーマを扱い、学校は地域から何を求められていたのか、学校は地域にどのような貢献をしたのか、あるいはしなかったのかといった重要なサブテーマについて、3 人のシンポジストの方々から発表があり、それに対してフロアから様々な意見が提起されました。シンポジウムの終わりかけに本質的な質問がなされるなど、大変盛り上がったシンポジウムであったと思います。

今回は発表を聴く側の立場からの大会参加となりました。今度は発表をする側から大会に参加しなくてはと思いつつ、筆をおかせていただきます。

第 42 回大会に参加して

林喜子（名古屋大学・院）

昨年は大会開催校ゆえにお手伝いとして参加させていただきましたが、本年度から会員となりました。1 日目の史料見学会から参加し、2 日目は研究発表・シンポジウムに参加しました。

史料見学会は、まず東武練馬駅からすぐの大東文化会館に集合し、学校史に関する写真のパネル展示を見ました。それから板橋キャンパスへ移動し、書道研究所と図書館を見学しました。書道作品だけを集めた展示室を想像していましたが、書道研究所の廊下や図書館の壁の随所に作品が展示されており、学内ツアーのような形で見学しました。一流の作品が景色に溶け込む中で学生生活を送ることができる環境を羨ましく思いました。

その後、歴史資料館に移動して百年史編纂に関するお話をうかがいました。最近になって総務課から歴史資料館へ資料が移管されたとのことで、大学内部の資料の収集に苦労なさっていることがわかりました。大東文化学院時代の卒業生に聞き取りをしておられることについて、聞き取りの成果を研究上どのように位置

付けるのか、百年史、ひいては教育史にどのように活かせばよいのか、というお話が印象に残りました。企画展「平沼騏一郎と土屋久泰～大東文化を創った二人のリーダー～」も見学させていただきました。

二日目は第1会場にて研究発表をさせていただきました。奈良県女子師範学校附属小学校を対象に、開校時の通学区制が選抜制へと改革された過程を報告しました。通学区制の附属小学校と代用附属小学校との異同を整理することや、附属小学校の設置に際するお金の動きを詳しく調べることで、附属小学校と地域の関係についてさらに考察を深められるのではないかとこの指摘を頂戴しました。より精度の高い研究にまとめられるようにしたいです。



(写真省略)

シンポジウム。上段は荒井明夫会員による趣旨説明。下段は3名の報告者（左から谷本会員、坂本会員、軽部会員）／写真：渡辺典子会員。

シンポジウムでは、三つの報告とフロアからの意見をききながら、「地域」という概念について改めて考えました。学校が誘致されるとき、そこに地域の人びとの願いや希望・期待を見出すことができるが、誘致反対者やそもそも誘致に無関心な者の願いはどのように評価すればよいのか。誘致賛成者の中でも学校への関わり方は寄付・土地の提供など様々であり、必ずしも一枚岩ではない「地域」の中で学校が設立された事実をどう評価するのか。これから研究をすすめていく上で避けては通れない課題なので、様々な意見をきくことができ大変勉強になりました。

最後になりましたが、大会の運営を担われた方がた、懇親会や研究発表であたたかく迎え入れてくださったみなさまに感謝申し上げます。

【総会報告】

〔1〕 会費値上げの検討結果について

一昨年の総会で、他学会と同様に会費値上げの必要があれば実施すべきとのご発言が会員からありましたので、幹事会にて検討を重ねて参りましたが、現段階では必要ないとの結論に至りました。この件、総会で了承されました。

理由は、①小規模学会のスケールメリットとも言えるが人件費がほとんどかかっていないこと、②同様に大会・幹事会は会場費が無料もしくは減免が受けられる大学・公共施設を中心に開催できていること、③ここ2年ほどは100万円を超える繰越金があることの3点です。

無論、今後、消費税値上げや会場費の高騰など諸般の事情により値上げが必要となれば、それこそスケールメリットを活かして直ちにお願いする手筈をとります。その上で、今回については見送ります。

〔2〕 来年度の大会校について

2020年度の第43回大会は軽部勝一郎会員にお世話をいただき、5月23日(土)・24日(日)の両日にわたり、甲南女子大学(神戸市)で開催することに決定しました。資料見学会は甲南学園史資料室です。詳細については次号以降でお知らせします。

なお、あわせて、来年度については試験的に大会参加費を徴収しないで開催することも了承されました。甲南女子大学の場合、大会参加費を徴収しないのであれば会場費を無料で借用できるということになっています。試算の結果、例年通りに大会参加費を徴収して会場費を納付した方が、財政的には約10万円のプラスとなることがわかりました。しかしながら、会場費の無償規定自体が法人の教育的なご判断です。これに地方開催であること、駅からの二次交通機関に恵まれないこと(日曜日はスクールバスなし、駅から登り坂を徒歩15分!!)を考慮して、若い院生・ODや大学に所属しておらず旅費支給がない会員への負担軽減策をとってみてはどうかとの声が幹事会であがり、総会のご判断をいただいたものです。せっかくの機会ですので、今年度以上に、多数の若い院生・ODの会員のご参加をいただきたいと思います。

II. 地方の状況(第3回)

愛知県三河地方の状況

久保田英助(愛知学泉大学)

報告者が所属する愛知学泉大学は、1906年に「寺部だい」が「安城裁縫塾」を桜井村(現安城市桜井町)に開設したところから始まる。1966年に岡崎に「愛知女子大学」(家政学部家政学科)を設置し、1982年に現在の「愛知学泉大学」に改名する。三河という田舎で寺部が女子教育機関を設立しようとした背景には、

三河には教育に対する強い情熱が歴史的に存在していたからだと考えている。そこで今回は、愛知県のなかでも三河地方の資料調査・学術研究の状況をまとめてみることにしたい。なお、岡崎市、豊田市、刈谷市、知立市、安城市、碧南市、高浜市、西尾市、みよし市、幸田町が西三河に属し、豊橋市、豊川市、蒲郡市、新城市、田原市、設楽町、東栄町、豊根村が東三河に属している。

1 県史、県教育史

まずは『愛知県史』の編纂状況から見ていきたい。2019年5月に、関ヶ原の戦いから宝暦年間までを扱った通史編4（近世1）、宝暦年間から廃藩置県の前までを扱った通史編5（近世2）、金融恐慌から敗戦までを扱った通史編8（近代3）が刊行されたばかりである。なお、これまでに通史編が7巻、資料編が36巻、別編が12巻刊行されている。ここでは通史編8の内容を簡単に紹介しておきたい。本書では、戦時下で翼賛選挙・徴兵や徴用・消費統制・切符制等が実施される中で、航空機・自動車・鉄道車両などの生産をはじめとした重工業・軍需工業が大きく発展していく様子が描かれている。これらの諸産業の状況は、戦後愛知の工業発展の歴史的な前提条件を形成したといえる。また、戦争末期の県民生活に大きな影響を与えた空襲と疎開、東南海地震と三河地震による被害、学徒動員や女子挺身隊・国民義勇隊の結成などに触れ、戦争末期の県民の過酷な状況も詳述されている。

愛知県公文書館では、2019年5月20日（月曜日）から8月30日（金曜日）の期間中、特別展示を行っている。以上の3冊に掲載した資料を紹介するという内容になっているので、興味があればぜひ足を運んでご覧いただきたい。

以上の3冊の刊行に少し先だって、『愛知県史研究』の最新号第23号も2019年3月に刊行されている。『愛知県史研究』とは、愛知県史の編さん過程における調査・研究の成果を紹介したものである。

次に、『愛知県教育史』については第5巻が2006年に刊行され、県教育史編纂事業は終了した。なお、2004年には資料編現代2、2005年には資料編現代3が刊行されている。

2 市町村史

つづいて市町村市の刊行状況を県立図書館所蔵で調査した。キーワード「市史」、「町史」、「村史」＋分類番号2155（日本史—中部地方—愛知県）で検索すると、2009年以降で74件の文献が見つかった。以下に、74件の中から三河の自治体史のみを抜き出して掲載する。

2009年：『性海寺文書』3（稲沢市史資料）

『碧南市史料』別巻4

『碧南市史料』第66集

『吉田藩江戸日記』2（豊橋市史々料叢書）

2010年：『碧南市史料』別巻5

『新編岡崎市史』額田資料編1

『神明社文書・本源寺文書』（稲沢市史資料）

『長嶋家御用日記』（岡崎市史料叢書）

『碧南市史料』第67集

2011年：『碧南市史料』別巻6

『新編岡崎市史』額田資料編2

『新編岡崎市史』額田資料編3

『新編知立市史』5
 『新編豊川市史』第1巻
 『新編豊川市史』第2巻
 『豊田市のあゆみ』新修豊田市史概要版
 2012年：『碧南市史料』別巻7
 『碧南市史料』第68集
 2013年：『碧南市史料』別巻8、69
 『新修豊田市史』15、18
 『吉良町史』別冊資料
 『幡豆町史』本文編3
 『長福寺文書』（稲沢市史資料）
 2014年：『碧南市史料』第70集
 『新修豊田市史』7、21
 『大樹寺文書』上（岡崎市史料叢書）
 『長福寺文書』2
 2015年：『碧南市史料』別巻9
 『新修豊田市史』13、16、19
 『新編知立市史』3-1、3-2
 『大樹寺文書』下
 2016年：『新修豊田市史』8、10、22
 『新編知立市史』別巻
 『碧南市史料』第71集
 『幡豆町史』本文編2
 2017年：『碧南市史料』別巻10
 『新修豊田市史』6、17、20
 『新編知立市史』6
 2018年：『新修豊田市史』9、11、23
 『新編知立市史』4、8-1、8-2
 『瀧山寺文書』上（岡崎市史料叢書）
 2019年：『新編知立市史』7

最も新しい『新編知立市史』7は、主に高度経済成長期以前の知立の生活習慣や文化を記録した内容となっている。市民を対象に行なった聞き書き調査や観察調査を通じて、文字資料では知ることが出来ない文化や生活などが描かれている点が特徴であろう。さらに付録のDVD-ROMより、ユネスコ無形文化遺産に登録された、「山車文楽」「からくり人形」「知立まつり」「秋葉まつり」を見ることができる。HPによると、DVDは愛知県内の市町村史では初の試みであるとのことである。

岡崎市のものとしては、まずは『新編岡崎市史』額田資料編1～3がある。『新編岡崎市史』額田資料編は、1993年に『新編岡崎市史』20が刊行され、ひとまず編纂事業が終わった後、2006年の旧額田町合併を機に新たに編纂されたものである。

また、岡崎市史料叢書の『大樹寺文書』上、下、『瀧山寺文書』上にも注目しておきたい。

岡崎市鴨田町にある大樹寺は松平四代親忠によって 1475 年に建立された浄土宗寺院である。同寺には家康に至るまでの松平氏、さらには徳川将軍家との関係を示す中・近世文書が多く残されているとされる。上巻では松平氏の三河での支配・発展を語るうえで欠かせない中世文書のほか、徳川将軍家との関わりを語る近世文書、合わせて 256 点が収録されている。下巻では、幕末～明治初年にかけての大樹寺の動向を知ることのできる「日鑑」全 14 巻が収録されている。

瀧山寺は 686 年開山と伝わる天台宗寺院で、保安年間（1120—24）仏泉上人永救の代に堂宇が整備され、本格的な寺院として成立した。上巻では、三河の中世史を語るうえで欠かせないとされる「瀧山寺縁起」が紹介されている。また 1604 年の検地帳などの寺領経営を示す資料をはじめ、瀧山東照宮の由緒書や勘定帳、当時の年中行事や明治初年の動向を示す史料などが収録されている。下巻では 1830 年から 1872 年までの寺務記録「年行事記録」38 冊が収録されている。

3 学校記念誌

次に、学校記念誌の刊行状況を確認していきたい。県立図書館の検索システムで、愛知分類 A376 を入力すると、愛知県内の学校・教育に関する資料の一覧が出てくる。それらの資料の中から、2009 年以降の三河の学校記念誌を抽出したところ、5 件ではあったが見つけることができた。

2010 年：愛知県立豊田西高等学校『愛知県立豊田西高等学校創立七十周年記念誌』
2015 年：愛知県立知立東高等学校『愛知県立知立東高等学校創立 30 周年記念誌 1986-2015』
愛知県立豊野高等学校『創立 30 周年記念誌 1986～2015』
岡崎市立緑丘小学校『創立 40 周年記念誌』
2018 年：愛知県立刈谷高等学校『刈谷高校百周年記念誌 2018』『刈谷高校写真百年史 2018』

愛知県立刈谷高等学校は 1918 年 11 月に愛知県立第八中学校として設立認可され、2018 年に創立 100 周年を迎えた伝統校である。また県内有数の進学校としても知られている。『刈谷高校写真百年史』では、これまでの 100 年を 8 つの時代に分けて写真を中心に振り返っている。また、歴代校長・PTA 会長・同窓会長、教職員名簿、刈谷中学校校歌、刈谷高等学校校歌、学校年表といった資料が収められている。

4 教育史関係の文献・論文

まずは愛知県の教育史研究の近年の動向から確認しておきたい。CiNii 論文検索で、2009 年以降の愛知県の教育史関係の論文・博士論文を以下のキーワードにより検索した。論文+博士論文で「教育史 愛知」では 29+1 件、「学校 歴史 愛知」で 223+1 件、「教育 愛知 歴史」で 580+2 件であった。また、「大学図書館の本を探す」で「学校 歴史 愛知」「教育 歴史 愛知」について検索すると、それぞれ 56 件、246 件がヒットした。これらから主な文献を以下に掲げる。

- ・糟屋豪志、小林裕紀、三浦彩子「旧愛知県立農業大学講堂（追進館）の歴史史料に関する研究」『東海支部研究報告集』47、2009
- ・梅田真治「愛知県における実業補習学校」『東京大学日本史学研究室紀要』13、2009
- ・高橋達也「戦前期女子高等教育史に関する研究（第 1 報）愛知県における女子高等教育の実態」『大学行政管理学会誌』14、2010
- ・山下廉太郎、高田麻美「愛知県立第一高等女学校実科生の「日誌」について—1916 年度における学びと生活」『教育史研究室年報』16、2010

- ・高橋達也「戦前期女子高等教育史に関する研究（第2報）愛知県における女子高等教育の実態」『大学行政管理学会誌』15、2011
- ・白井克尚「中学校における歴史研究と歴史学習の協働に関する史的考察—愛知県横須賀中学校「郷土クラブ」の実践の分析を通して」『歴史研究』57、2011
- ・吉川卓治、山下廉太郎、宝金華、他「愛知県第一師範学校附属小学校における教育実習—市川藤五郎「執務日誌」を手がかりに」『教育史研究室年報』19、2013
- ・吉川卓治「戦後改革期の愛知県における高大接続論議—新制大学高等学校連絡懇談会に注目して」『教育史研究室年報』20、2014
- ・吉川卓治「愛知県における新制高校成立過程の再検討」『教育史研究室年報』22、2017
- ・山下廉太郎「一九〇一年度における愛知県第一師範学校「日誌」を読む」『教育史研究室年報』22、2017
- ・田畑きよみ「明治初期初等教育機関における言語教育計画—愛知県および岐阜県の義校を事例として」『言語情報科学』15、2017
- ・釜田史「愛知教育大学史に関する基礎的研究（I）—敗戦後から愛知学芸大学発足まで」『愛知教育大学研究報告 教育科学編』67(1)、2018

次に、2009年以降の三河の教育史関係の論文・博士論文を、やはり CiNii 論文検索で上と同じキーワードにより検索した。論文+博士論文で「教育史 三河」では 4+1 件、「学校 歴史 三河」で 1+0 件、「教育 三河 歴史」で 3+1 件である。また「大学図書館の本を探す」から「学校 歴史 三河」「教育 歴史 三河」についても検索を行い、それぞれ 4 件、19 件がヒットした。さらに、三河を市名に入れ替えて検索したところ若干の文献を見つけることができた。これらのうち三河の教育史であろうと思われるものは以下である。

- ・佃隆一郎「豊橋にあった、陸軍教導学校と予備士官学校 —愛知大学の「施設面での“前身”」として」『愛知大学史研究』3、2009
- ・嶋田康彦「尾張・三河の寺子屋について—近代学校教育制度以前」『日本教育史資料8』を読む『国際人間学フォーラム』7、2011
- ・酒井宏明「愛知第二師範学校附属小学校の教育課程の変遷—生活教育の成立と展開を中心として」『地方教育史研究』33、2012
- ・伊藤晴康「私立豊橋裁縫女学校の校地と校舎の変遷について—明治35年から昭和7年まで」『豊橋創造大学紀要』16、2012
- ・山下廉太郎「三河地域の裁縫塾にみる門人の進路—一九〇〇年-一九一〇年代を対象にして」『日本教育史研究』31、2012
- ・山下廉太郎「問題提起 三河における旧制中学校の設立と廃止をめぐる動向—地域間「交流」と地域意識に着目して」『地方史研究』65、2015

以上のように、三河に限定した教育史研究は必ずしも多くはない。

三河は歴史的にも教育に熱心な場所であったと言えるはずである。大正新教育に対しても三河の諸学校は熱心であった。岡崎の事例を簡単に紹介するが、1916年2月25日に岡崎町額田郡公会堂で開催された三河・全国高等小学校長会に、額田郡から「高等小学校児童に自学自習の習慣の養成に適切な方法如何」という議案が提出されて、新教育の進展に大きな影響を与えている。岡崎においてこうした新教育を最も熱心に追求したのは、愛知第二師範学校附属小学校で、愛知県だけでなく東海地方の新教育の拠点校と注目されていた。愛知第二師範学校附属小学校については、酒井宏明の研究（2012）でも紹介されている。三河では様々な場

面で注目に値する教育が行われていたことが、市史などを見ればわかる。今後、三河の教育史研究がさらに深まっていくことを期待したい。

Ⅲ 諸連絡

【入会・退会・異動】(2019年5月1日現在・敬称略)

- ・退会：河田敦子（東京家政学院大学）
- ・入会：林喜子（名古屋大学・院、研究テーマは「1900年代の師範学校附属小学校特別学級（「劣等児」「低能児」対象）」）
- ・異動：国谷直己（川村学園女子大学）

【寄贈図書】

- ・梶山雅史編著（2019）『近代日本教育会史研究【新装版】』不二出版、全 420 頁、ISBN：978-4-909942-00-5、本体¥4,600。

Ⅳ. 事務局より

【会費納入について】

本年度大会に参加されなかった会員の皆さまには、会費の納入をお願いします。今回の通信に金額入り（¥4,000）の振込用紙が入っている方は昨年度までの会費納入が終了しておりますので、2019（令和元）年度分を納入して下さい。金額なしの振込用紙が入っている方は未納分がありますので、封入したメモをご覧になり、未納分も納入して下さい。入金された旨、ゆうちょ銀行から連絡がありましたら、速やかに当該年度の『地方教育史研究』を発送します。

【会員名簿について】

現在、会員名簿の編集作業を行っております。①氏名、②所属機関、③住所、④電話番号、⑤e-mail アドレス、⑥現在の研究テーマ、の 6 項目を登録されていない方、あるいは変更があった方は、7 月末日までに下記の事務局メールアドレスにご連絡下さるよう、お願いいたします。院生の籍を残したまま就職された方、定年で名誉教授になられた方も、その旨ご一報下さい。

なお、所属機関がある方については、個人情報保護（ならびに異動を伴わない転居の際の事務手続き簡略化）の観点から、住所・電話番号を所属機関とされるようおすすめいたします。また、非公開とするデータがあれば、その旨も明記して下さい。

全国地方教育史学会 事務局

〒002-8502 札幌市北区あいの里 5 条 3 丁目 1-5 北海道教育大学札幌校 三上敦史研究室内

TEL/FAX 011-778-0380

E-mail mikami.atsushi@s.hokkyodai.ac.jp

公式 HP <http://www.waseda.jp/assoc-zckyoiku/>
